装苑 → 服装文化：装苑・手藝と洋裁統合誌 → 装苑：服装研究

東京 ： すみれ會 , 1936－

復刊1号（1946年7月号）の表紙は紺と白のさわやかなワンピース姿

「装苑」は日本で最も長い歴史を持つ服飾雑誌である。洋装の黎明期より、日本のファッションが世界で評価されるようなった今日まで、常にファッションの現状と行方を見据えた編集がなされており、雑誌そのものが日本の洋装史の一端といえる存在である。

創刊は1936（昭和11）年。職業婦人や学生の制服などに洋服が用いられ日本の洋装化が進んだ時代だった。日本初の洋裁教育の学校として認可された「文化裁縫女学校」（1936年10月より文化服装學院に改称）により、同校の機関誌などを制作していた「すみれ會」（1944年から文化服装學院出版部、49年から文化服装学院出版局、70年から文化出版局に変更）から発行された。創刊号は4×6倍判（ほぼB5判）の全32ページ、仙花紙と呼ばれたざら紙が使用された。発刊の辞には「学校の目的としている服装の改善と普及に努めるため」とあり、さらに「実用と装飾を兼ね備えて、着る人の品性と人格を表わし、身体美を発揚すると同時に経済的に衣服を作り出す、すなわち服装の合理化を図る」と言及している。これは今日にも通じる普遍的な理念といえるだろう。

内容は、「考現学」の提唱者で服飾研究でも活躍した今和次郎の「西洋服装史」、清水七太郎が服飾美学を説く「日常生活とデザイン」などの連載のほか、海外ファッションや、洋裁技術解説、衣類の害虫予防法など。外見に比べ内容は濃い。当初の発行部数は3000部弱。文化服装学院の卒業生を中心に読まれていたが、堅実な内容と販促活動により発刊3年目には1万5000部に達した。この頃は画家藤田嗣治の論文「美しくなりゆく日本の女性」、森岩謙一の「デザイン修行十ケ条」の連載があり、戦時色が強まるなかでも「装苑」は発行部数を伸ばした。女性の社会進出が必然的に機能的な洋装を選択し、豊かな創造性と装う喜びが多くの女性を魅了したのではないだろうか。しかし第二次世界大戦が勃発し、「装苑」は1941年11月号から、「手藝と洋裁」「服装文化」と統合され「服装文化」となったが、1944年に休刊となった。

「装苑」の新たなスタートは1946（昭和21）年7月号から。敗戦後の物資不足のおり、きものから洋服を作る「更正服」企画などが歓迎され、たちまち部数は5万部に達した。おりしも戦争未亡人や若い女性の間では手に職をつけたいという意識が高まり、洋裁ブームが過熱し洋裁学校が急増していた。こうした時代背景に加え作り方を掲載した付録をいち早くつけたことも人気を呼んだ。並行して誌面には徐々に海外情報が増加する。アメリカ占領時代はすべてアメリカ経由だったが、1950年

の朝鮮戦争勃発を期に日本が好景気に転じると、ヨーロッパからの情報が直接届くようになった。1953年には文化服装学院が創立30周年を記念し「クリスチャン・ディオール・ファッションショー」を開催し、本誌は1954年2月号にその大特集を組んだ。画家の猪熊弦一郎が「胸を打つ創造力の素晴らしさ」とショーを絶賛しているが、この一大イベントを機に「ファッションといえばパリ」という流れが日本に定着していく。当時パリ・オートクチュール界はまさに全盛、ディオールのほか、バレンシアガ、ジャック・ファトらの作品が誌上を飾り、その流れを汲む日本の作品が多数掲載された。掲載作品の製図や作り方のページも充実しており、洋裁の指南書としても評価は高い。当時のページ数は200ページ余り。本誌の好調を受けてかライバル誌が次々と誕生する。「ドレスメーキング」(鎌倉書房)、「若い女性」(講談社)、「服装」(同志社)などだが、部数でも反響の大きさでも本誌は常にトップの座を保ちつづけた。

1956年には、ファッションデザイナーの登竜門となる「装苑賞」が創設された。受賞者には、小篠順子(コシノジュンコ)、高田賢三、山本寛斎、熊谷登喜夫、山本耀司ら後のビッグネームが連なる。出版社の母体は文化服装学院だが広く門戸を開放して応募を募り、誌上では、受賞者を継続的にデザイナーとして起用している。才能を発掘しかつ育成に努めたことが賞を影響力のある存在へ押し上げたといえるであろう。

1960年代はファッション史上の重要な転換期である。ロンドンのマリー・クワントのミニスカートに続き、60年代後半にはパリ・コレクションで、アンドレ・クレージュ、パコ・ラバンヌ、ピエール・カルダン、そしてイヴ・サンローランが次々と革新的なスタイルを発表する。1968年にパリで五月革命が起こると地殻変動はさらに加速する。オートクチュール志向はゆらぎ、気軽で自由な新しいファッションが台頭、プレタポルテ(高級既製服)が花開く70年代へと繋がっていくのである。本誌はそうした流れの震源地であるパリ・コレクション情報や、その主役たちの動向をつぶさに紹介している。なかでも文化服装学院出身で装苑賞を受賞した高田賢三については詳しい。1968年11月号ではパリでの活動を追った「デザイナーの一日」があり、1970年4月号には高田のブティックで開催された初コレクションを他誌に先駆けて掲載している。またパリ・コレクションの正式な取材メンバーと認められたのも早く、1966年にはパリ支局を開設。情報に鮮度と広がり、深みが加わった。当時の誌面には、欧米に次々と進出した日本人デザイナー、三宅一生、山本寛斎、鳥居ユキ、森英恵らの活躍ぶりが輝かしく掲載されている。彼らの作品に垣間見える、きものから発想した体に合わせて着る直線裁ちの服や重ね着スタイルなどが、西洋の服作りに多大な影響を与えたことが後の誌面からうかがえ興味深い。

1970年代になると部数は飛躍的に伸び300ページ以上の厚さになる。掲載される服は既製服が中心になり体数も増加する。「アンアン」「ノンノ」の登場により本誌にもカタログ的要素が加味されるが、カメラマン、モデル、ヘアメークなどのキャスティングからロケ場所にいたるまで吟味されたファッションページは、いきいきしていながら格調が高い。さまざまなジャンルのクリエーターたちが制作への参加を競いあったといい、本誌でデビューし羽ばたいていった才能は数多い。本格的なファッションフォトグラファーが次々と登場している。立木義浩、吉田大朋、増渕達夫、大倉舜二、藤井英男、斎藤亢らと、一世代前の奈良原一高、藤井秀樹、佐藤明らの写真を比較してみると時代の変化がよくわかる。また本誌の人気はモデルの魅力によるところも大きい。専属契約を結び、

1971年5月号　人気抜群だったティナ・ラッツ（右）と丘ひろみ
撮影は立木義浩

モデルを雑誌の顔として起用した。オートクチュールの時代は松本弘子、松田和子、高島三枝子らが、60年代になると入江美樹、立川マリ、山本リンダらが登場し、なかでも60年代後半から70年代にかけて活躍した、丘ひろみとティナ・ラッツはアイドル並の人気を獲得した。彼女らのこぼれるような笑顔は時を経てなお輝いてみえる。

70年代は日本のファッション界も飛躍した。1975年2月号では、東京コレクションの基盤となるTD 6（トップデザイナーズ6の略　メンバーは金子功、菊池武夫、コシノジュンコ、花井幸子、松田光弘、山本寛斎）が1974年11月に結成されたと報じている。同年9月号には2回目のコレクション情報が掲載され、前後して新しいブランドが次々と生まれた。1981年には山本耀司、川久保玲がパリ・コレクションに参加し反響を呼んだ。こうした流れのなかでDCブランドブームが起こり、ファッションが多くの人にとってより身近なものになっていく。このような日本のファッションの大きな変化についても、「装苑」には豊富な情報が掲載されている。

本誌の名物企画であった「セツ・シネマ・セミナー」にも触れておきたい。イラストレーター長沢節の独自の審美眼による映画評で、1971年3月号から、筆者が不慮の事故で亡くなる1999年10月号まで332回連載された。エキセントリックな評価は時に物議をかもしたが、多くの読者に支持され一部は単行本化されている。世間で評判の映画が酷評されることもあったのだが、底流には創造に対する筆者の真摯な姿勢が感じられ、「ファッションの創造」を目指す読者への厳しくも温かなエールとも思える。

日本の若い女性向け雑誌は、70年代初頭の「アンアン」「ノンノ」の登場以後変容する。生まれては消えていく雑誌の大半は、ファッション誌と銘打ってはいても内容は消費のためのカタログに近い。ファッションを「創る」という視点でとらえ、さまざまな角度からその本質に迫ろうとする「装苑」は今や少数派となった。しかしファッションの可能性に限界はない。「装苑」が追求しつづける、創り装う喜びが尽きることはないだろう。

なお判型は、1982年5月号からA4変型判に変更された。1983年1月号から表紙タイトルは「SO-EN」になり、「装苑」が小さく併記されていたが、1997年4月号から再び「装苑」に戻っている。　（中村敦子）

2005年7月号表紙